

世界史B（2年） 4/20～24の学習内容②

（1）外部勢力の侵入

「ゲルマン人の大移動」のことを、最初に思い出してみましょう。

まだローマ帝国があった時代、今の中央ヨーロッパ（ドイツ）、東ヨーロッパ（チェコやポーランド）、北ヨーロッパ（デンマークやノルウェー）は、ローマ帝国の支配が及んでいませんでした。

ここにはゲルマン人たちが部族ごとに分かれて住んでいたのですが、4世紀に騎馬遊牧民のフン族が中央アジアから侵入してきたため、中欧と東欧のゲルマン人が、玉突きのように西ローマ帝国領内へ侵入してきたのです。これが、「ゲルマン人の大移動」です。

ところが、北ヨーロッパにいたゲルマン人は、移動しないでそのまま北欧に残っていました。彼らは中東欧のゲルマン人とは違う展開になっていくので、別扱いにして「ノルマン人」と呼びます。

資料集 P140①の地図を見てみてください。地図の中で、エメラルドグリーンの色がついているところが、ノルマン人が住んでいた地域です。地名で言うと、スカンディナヴィア半島のスウェーデンとノルウェー（ノース人）、ユトランド半島のデンマーク（デーン人）です。

ノルマン人は、腕のいい漁師、狩人であり、また高度な航海技術を発展させました。彼らはその航海技術を使って、遠い地域との交易をおこなう冒険商人としても活動するようになったのです。

当時の遠隔地交易は、危険がいっぱいです。「商人＝戦士」でないと、務まりません。

彼らは商人でしたが、生活が苦しくなった場合や、相手に隙が見られた場合は、海賊行為や略奪を行うこともありました。いわゆる「ヴァイキング」と呼ばれる人々です。下の絵の左側のような人々でした。



「ヴァイキング」というのは、「入り江の人」という意味です。スカンディナヴィア西岸にはフィヨルドが続いていて、その湾の奥深くがヴァイキングの集落だったため、そう呼ばれたのです。

カール大帝が登場したところから、このノルマン人が、西ヨーロッパに侵入してきます。

カール大帝はノルマン人の侵入をよく防ぎましたか、3バカの孫たちが争って帝国を分裂、弱体化させてしまうと、ノルマン人の侵入を防ぎきれなくなっていくます。

ノルマン人たちの侵入によって、西ヨーロッパの各地には、ノルマン人たちの支配地が次々と形成されていきました。西ヨーロッパの国王たちは、ノルマン人たちに対して次の3つのいずれかの対応を迫られます。

- 撃退する。
- 征服され、殺されるか家臣になる。
- 領地を与えて家臣にする。

このいずれになるかは、両者の強さによって決まります。では、ノルマン人の侵入が西ヨーロッパにどんな影響を与えたかを、次に見ていきましょう。

(2) フランスのノルマン人

フランク王国が分裂して西フランク王国が成立しますが、分裂して弱体化したフランク王奥は、ヴァイキングたちにとって絶好のカモでした。

西ヨーロッパには流れの緩やかな川が多いので、ヴァイキングは海から川に船を乗り入れて、次々と西フランク人たちを襲っていきます。資料集P140 を見てみてください。左上の船が、ヴァイキングが利用したロングシップです。

船底が浅いこの船は、浅い川でもこ座礁することなく進むことができ、進めなくなると漕ぎ手が担いで移動しました。西フランク王国にとっては、終わりのない悪夢のようなものでした。

西フランクの国王は、戦って犠牲を出すよりも、領地を与えて形式上の家臣にすることを選びます。ノルマン人のロロという族長に公爵の位を与え、北フランスの一部を譲ることにしました。

資料集P149Aの、「11世紀前半」(一番左)の地図を見てみてください。フランスの中に、ピンク色に染まった場所がありますね。ここがロロに与えられた「ノルマンディー公国」です。

「ノルマン人の国」だから「ノルマンディー」なんですね。

右の銅像が、ロロです。彼はかなりの大男で、そしてとんでもない暴れん坊でした。彼の体重に馬が耐え切れないので、戦場でも常に徒歩で戦い、「徒歩王」というあだ名がついたほどです。

国王の家臣となるときは、王の足にキスをする、というのが、当時の決まりでした。西フランク王にその慣習を要求されたロロは、家臣に代行を命じました。その家臣は、西フランク王の足をつかみ、逆さ吊りにして足に口をつけたといいます。当時の西フランクとロロとの、力関係をうかがわせるエピソードです。

このノルマンディー公国はとても重要な国で、この国の屈強なノルマン人たちが、南イタリアやイギリスに侵入して、新たなノルマン人たちの国を作っていくのです。



それでは、次は南イタリア、そしてイギリスのノルマン国家を見ていきましょう。

(3) 南イタリア

イタリアはカールの孫のロタールが受け継いだ地域でしたが、彼は呪われているかのようについてない人物でした。その領土はどんどん奪われ、早くも 875 年には血筋が絶えてしまいます。

北イタリアでは「教皇領」の他に、貴族や都市が小さい国家を立てて、小国の乱立状態になっていきます。一方、南イタリアとシチリア島は、様々な勢力による奪い合いが続きました。

シチリア島の場所がわからない人は、資料集P136の地図を見てみてください。イタリア半島は、ピンヒールのブーツみたいな形をしています。そのつま先が蹴飛ばしている場所に浮かんでいるのが、シチリア島です。

私は昔ここに行ったことがあるのですが、海産物が無茶苦茶おいしいんですよ。一方で、イタリアの最貧地域の一つでもあり、昔からマフィア（日本のヤクザのような、非合法の暴力組織です）が仕切っていた伝統がありました。夜になると、一転して雰囲気が悪くなった記憶があります。

このシチリア島、そして南イタリアを狙っていたのは、イタリア統一を狙う教皇、北アフリカを支配するイスラーム勢力、そして、ビザンツ帝国でした。

当時、ノルマンディー公国に、ロベール＝ギスカルという戦士がいました。「ギスカル」というのは、「狡猾な」という意味で、彼が力押し一辺倒の猪武者ではなく、奸智に優れた策略家であったことをうかがわせます。

彼は6人の兄弟一族とともにノルマンディーを離れ、自分の王国を手に入れるために、南イタリアへ向かいます。最初は教皇の傭兵（雇われ軍人）として、イスラーム勢力やビザンツと戦いましたが、やがて策略によって自分の領土を築き、南イタリアとシチリアの支配権を手に入れました。

彼の甥のルッジェーロ2世は、この地域の国王に即位します。「南イタリア(中心都市はナポリ)」と「シチリア島」を両方支配しているため、「両シチリア王国」と呼びます。

(4) イギリス

初期イギリスの歴史は、他の地域に比べて複雑です。頑張って理解しきりたいところですね。

イギリスは「ゲルマン人の大移動」の時代に、アングル人とサクソン人（まとめてアングロ＝サクソン人）がヨーロッパから移動してきて、「七王国」を建国しました。

「七王国」とは、その名の通り七つの王国の集まりでしたが、彼らはその後、ヴァイキングの侵入に悩まされることにあります。この地域を襲ったノルマン人は、現在のデンマークから襲来した人々で、彼らを特に「デーン人」と呼びます。

七つに分かれていたままでは抵抗できないので、七王国の一つだったウェセックス王のエグバートが、七王国を統一しました。この国は「アングル人」の名をとって、「アングルランド」、すなわち、「イングランド」と呼ぶようになります。

この王朝の全盛期は、エグバートの孫のアルフレッド大王の時代です。彼は国内の改革に努めてイングランドを発展させ、デーン人をイングランドから撃退することに成功しました。

しかし、アルフレッド大王の死後は、無能な国王がたびたび現れ、アングロ＝サクソンの貴族にも愛想をつかされるようになります。その隙をついて、デーン人の王がイングランドを征服しました。

デーン王のクヌートは、デンマーク、イングランド、ノルウェーの3国の国王を兼ねて、3国の間に広がる北海を囲む帝国を築きました。「北海帝国」と呼びます。

右の人物が、クヌートです。あんまり強そうじゃありませんね。

下は、「ヴィンランド＝サガ」という日本のマンガのクヌートですが、こちらはいかにも英雄、というキャラ造形で描いていますね。



クヌートが死ぬと、アングロ＝サクソン人の王が復活しますが、これだけグダグダな状況のイングランドが、誰かに狙われないはずがありません。

次に攻め込んできたのは、デーン人でなく、フランスのノルマン人でした。フランスのノルマン勢力って、なんでしたっけ？



そう、「ノルマンディー公国」のノルマン人たちです。初代ロロの子孫、ノルマンディー公ウィリアムが、イングランドに攻め込んできて、アングロ＝サクソン人を征服しました。

ノルマン人が建設したイングランドの王朝を、「ノルマン朝」イングランドと呼びます。この王朝は、途中で何度か名前が変わりますが、今のエリザベス2世まで続いています。

ここが混乱しやすいところですが、ノルマンディー公ウィリアムは、「フランス王の家臣のノルマンディー公であると同時に、イングランド王」なんです。

資料集P149¹の「11世紀後半」の地図を、もう一度見てみてください。

ピンク色になっているのが、ノルマンディー公の領土です。

この時代は、貴族たちが自由にふるまっていて、国王の言うことをあまり聞こうとしません。ましては、フランスは弱小な「かっぱ男」のカペー朝が国王です。

フランス王の直轄地は、子の地図で紫色に染まっているところ。ノルマンディー公の10分の1以下の領土しか、持っていないんです。

中世前期の国王は貴族とほぼ対等で、学級代表みたいなものということを、よく理解しておいてください。P149¹の地図は、あまりに弱小なフランス王が、ノルマンディー公をはじめとする強力な貴族を、次第に従えていくことを表す地図なのです。

(5) ロシア

最後はロシアです。東ヨーロッパは、スラヴ人が住む地域です。

フランク王国の勢力も及ばなかった地域で、キリスト教ではない多神教が信仰されてきました

教科書のP129の地図を見てみてください。スカンディナヴィア半島から、赤い線を右へたどっていくと、ノヴゴロドというロシアの町のあたりで下に曲がって、ドニエプル川をたどって黒海へ出ていますね。

ここから南はビザンツ帝国の領土で、東へ行くと草原地帯を中国までつないでいく「草原の道」にアクセスすることができます。ロシアは森におおわれた寒冷な地域ですが、商人でもあるノルマン人たちにとっては、なじみの商業ルートでした。

このルートをたどって、リューリクというノルマン人の族長がロシアへ侵入した、という伝承があります。1ページに乗せたヴァイキングの絵は、リューリクとその家臣を描いたものです。

リューリクが率いていたのは、「ルーシ」と呼ばれる部族でした。彼らはロシア地方のスラヴ人を征服し、「ノヴゴロド国」という国を建てます。

「ルーシ」たちが建てた国だから、「ルーシア＝ロシア」なんですね。このノヴゴロド国が、ロシアの原型とされています。

教科書P129の地図で、ノヴゴロド国を確認してみてください。かなり北の方にありますね。この地域はあまりに寒すぎるので、リューリクの後継者たちは、より南のキエフに拠点を移しました。「キエフ公国」と呼びます。

ロシアの国王と貴族は、当初はノルマン語を話していたのかもしれませんが、長い年月の間にスラヴ系の言語を話すようになりました。だから、今のロシア人はスラヴ人です。

最後に、教科書P129の地図をもう一度確認してみてください。

黄色で塗られているのが、ノルマン人が占領したところです。

- ・フランスのノルマンディー公国
- ・南イタリアの両シチリア王国
- ・イギリスのノルマン朝
- ・ロシアのキエフ公国

（6）北欧の国々

北欧のノルマン人たちは、次々と西ヨーロッパに侵入していきましたが、地元に残った人々も少なくありませんでした。彼らは、現在まで続く3つの国を形成していきます。

デンマーク、ノルウェー、スウェーデンです。これらの国々は、やがて先祖伝来の多神教を離れてキリスト教を受け入れ、西ヨーロッパの一員となっていきます。

2020年4月、スウェーデンを舞台にした「ミッドサマー」という映画がプチブレイクしましたね。ノルマン人の古い習慣を残した村を舞台にした、かなりヘビーな鬱映画です。僕は公開当初に映画館で観てきました。

同じ監督の前作「ヘレディタリー」が、僕の知る限り、21世紀最高のトラウマ映画だったからです。大音量で見ると、無茶苦茶怖いですよ。

ホラーものが嫌いな人は、絶対に見ないほうが良いです。僕は、見てから1週間ぐらい、「ヘレディタリー」が夢に出てきました。マジです。